

か独立性は、日本国である以上完全な自律や独立はありえない。そこで京都との距離感を保った。京都の中央国家を中央国家たらしめるポイントはどのような人物であっても、そこに官職を与えて天皇との距離を測る、官職に就任することによって、王朝勢力に包摂されかねない。江戸時代でさえ、徳川将軍は内府、御三家は大納言、中納言、薩摩は島津中将家であり、官職の呪縛から自由ではなかった。多少でもその呪縛を断ち切ろうという意味を明瞭にした頼朝は、自らを<鎌倉殿>と称した。

天の時をもたらした<鎌倉殿>の誕生

頼朝が挙兵する、天の時、1180年代を高く評価する考え方がある。1180年の8月挙兵、12月の時点で鎌倉の政治権力は樹立されていく。そこから始まって内乱の10年、第1期、源平の争乱は1185年3月24日壇の浦の合戦で平氏を討伐することによって、対平氏戦略は終わる。第2期の内乱は、対奥州戦争の5年間、義経に関しては、勝ち組としての義経から、敗者の義経に変貌する。

吾妻鏡の治承4年4月、以仁王と源頼政が平家に反旗を翻す。頼朝挙兵は平家が世を取って20年、平家は福原に都を遷し清盛は宗教勢力に対抗した。これに対して、東海東山北陸に以仁王の令旨は広まった。これが天の時。平氏政権の持っている急進的な権力の掌握の仕方があらゆる部分と衝突し始める。それが以仁王の令旨と相まって、源氏に天の時を与えていく。この間、頼朝は伊豆半島の流人として20年の歳月を過ごす。

鎌倉の主と仰ぐ、<鎌倉殿>誕生の瞬間は12月12日、都市鎌倉の誕生でもある。

北条氏も官職に対して恬淡としているが、それと対照的に<鎌倉殿>にこだわった。のちの執権北条高時は<鎌倉殿>と称し、実質上の鎌倉の主であることを天下に示している。鎌倉という風土にあって、頼朝の政策、鎌倉殿の政策が原点となり、東国の王としての原点を守っていく。鎌倉幕府以来750年の長きに亘って続いた武家政権の原形質が、<鎌倉殿>の誕生とともにつくられたのだ。日本の歴史に天の時が訪れる。

地の利は武力の集中、人の和は頼朝のカリスマ性

武家政権が誕生した折の地の利は何か。蝦夷戦争とのかかわり、関東と東国という地域ブロックは兄と弟の関係だ。この兄弟関係にも似た地域同志の相克が、中央にとっては征夷の対象とされた。東は常に警戒すべき地域だから、そこに関を置いた。そこからさらに

北にあるのが東北。古代政権は、この東北をフロンティアでなくする運動をしている。蝦夷戦争から奥州合戦までの長期の東北との戦いの中で、征夷に対する認識が強く観念された。東国の武力的な基盤の形成は、蝦夷たちとの戦争を通してそこに武的な先進地域、武力の兵たん基地としての関東の役割が生まれた。

関東は、武器や船、人間(兵士)を用意しなくてはいけない。鎌倉への道は、そこに拠点を据えるだけの地勢的な意味があった。



六浦湊へのルート朝夷奈切通

人の和は、頼朝という人物の個性によってつくられた。頼朝は一種の差別論者、集まってくる人たちに、段階をつけていく。頼朝は門閥という形で差別する。源家の一門か否かで、^{くにのかみ}先天的に得られるものを優先した。舅の北条時政でさえ国守のポストを与えられたのは頼朝の死んだあとである。

<福原の夢・海洋国家構想>と楕円構造の国家

平氏の政権、源氏の政権はともに中世という時代をはぐくんだ重要な政権だ。よく平氏は古代的で、源氏の鎌倉幕府は中世的であり、時代の差がそこにあるから平氏は滅ぼされたというが、けっしてそうではない。平氏の政権も源氏の政権も中世的で、共通の分母、母体を持ちながら、一方では、平氏の政権というのは、福原を軸にしながらか海洋国家構想とよばれるように、「福原の夢」というものを想定することによって、東アジアと同居するスタイルを設定する。これは平氏政権の一つの政権構想である。同じ中世のなかであっても、頼朝の国家ビジョンというのは、海洋国家構想とは別個の構想である。東アジアとは同居しない形、同心円的な権力構造から楕円構造という軸を二つ持った双軸的な国家体制、というのを結果として頼朝は持ったことになる。

平泉、福原、鎌倉は古代からの脱却を図った<三都>

平泉、福原、鎌倉という三都、福原と鎌倉は^{まご}紛うことなく海というのを視野に入れている。なぜ平氏が福原に自らの都を移したか？なぜ武家は鎌倉に都をつかったか、古代からの脱却、内陸志向から外に向けての構想が明らかにそこにあった。